

存在と不在をめぐる問題

三谷 恵子

0.0. あるものの存在あるいは不在を認めるという手続きは、人間の外界認知の最も基本的なカテゴリーを形成する。言語活動におけるあらゆる発話の根底にはこの様な認識に基づく存在的前提がある。従って言語における存在、およびその否定である不在の表現はそのような外界認知の反映として重要な位置を占めると考えられる。存在表現（以下EE）、不在表現（NEE）をもたないような言語は存在しないであろう。本論ではEE/NEEを巡る問題について幾つかの言語、特にいくつかのスラブ語の構造に見られる特長を具体的な考察の対象としながら検討する。

以下のテキストにおいては、一連の、整合性を持った言語活動の表現形を、その形態に変わりなく「テキスト」、テキストまたはその断片が機能する場を「文脈」とよぶ。また、テキストにおける情報構造および統語構造の最小単位として「文」を考え、これを考察の基本単位とする。なお、テキスト中略号として、本文中に注記してある以外に以下のものが使用される：

D T: ドイツ語； E G: 英語； F R: フランス語； J P: 日本語； M G: マジャール語；
R S: ロシア語； S H: セルビアクロアチア語； S L: スロベニア語； I E: インド
ヨーロッパ語。

1.01. 存在・不在の表現においてはあるものの存在、不在が問題となる。そのような認知の対象となるものを内在主体X、Xの存在が問題となる場をYとしよう。さしあたり個体変項X、Yの存在的な意味特性（例えば所謂活動性／不活動性、あるいは抽象性／具体性など）、XY間の関係の性質（XのYにおける存在が恒常的なものか一時的なものか、XはYから除去可能か不可能か、など）は問わ

ないこととする。EE/NEE を形成する統語構造上の核は述語カテゴリーである。これをPRED、PREDに含まれる統語構造上の一致、時制、法に関する意味カテゴリーをINFL、そのなかで統語上の主語との関係でPREDの文法形態を決定する意味範疇をAGR とする¹。否定の作用子はNEGとし、さらにXに関し補助成分Qを用意する。Q はどのようなものでもよいが、特に定性DEF、不定性INDEFを用意しておく。ここから、Y に(Q)Xが存在する／しないこと、は便宜的に次のように記号化される：存在：eY((Q)X)；不在：nY((Q)X)。

1.02. 存在主体X に意味格としての主題格SUB、Xの存在・不在が問題となる場Yに意味格としての所格LOCを割り当てることができる。これらの基本的な意味格がどのような表層格を与えられるかは個別言語において選択されるPREDと統語構造の特長によって決定される。言語によっては個体変項X, Y の内在的意味特性がEE/NEE の統語構造、PREDの選択に関与的となる。我々に馴染みの深い日本語の、「ある」「いる」における対立はこの一例で、「YにXがある・いる」「XはYにある・いる」という存在表現では基本的にX の活動性・不活動性によってPREDが選択される：

101)地面には緑の木と、緑の草がありますね。 (秋の朝、19)

102)ハチの種類は極めて多い。世界に十万種のハチがいるといわれている。
(毒物、18)

ただしこの対立は具体的な、ある特定の場におけるX の存在を表す場合においてのみ実現され、後述する所有・帰属の意味においては状況は異なる（「私には田舎に親戚が・土地がある」）。

様々な言語を調べれば、XまたはYの意味特性がEE/NEE の統語構造、PREDの選択に関与する種々の例が明らかになることだろう。

1.03. 上記のようなX の内在的意味特性ではなく、文脈のある時点で与えられる意味特性に注目しよう。発話においてある認識の対象φがDEF あるい

はINDEF の範疇として特長付けられるために言語は幾つかの表示手段を持っている。音調などの聴覚手段を考えないことにすると、容易に想起できるのは冠詞類、あるいは前承性を表す語彙などの明示的手段である。形態素として冠詞類を持たない日本語の場合、指示詞（この、その、そのような、など）などの決定子を用いる手段があるが、それ以上に日本語の特長としては重要な要因となるのは同一文脈の中で名詞（句）が新出であるか既出であるかという判断、助詞「は」「が」などの使い分けと語順操作である。次の一例でそれが示される：

- 103) サラマンカのパンシオン<エルアルコ>は…小さな広場に (INDEF) にむかって建っていた。広場(DEF)の向かい側には市場が(INDEF)があり、市場の(DEF)雑踏についてそこをまわりこむと、バスの発着所が(INDEF)あって、車体のかしいだような古いバスが (INDEF)とまっていた。(サラマンカ、50)

冠詞類を持つ言葉ではある程度の範囲においてDEF・INDEFのカテゴリーを冠詞類によって示すことができる。これに対し冠詞類を持たないスラブ語でDEF・INDEF のカテゴリーと密接に結びついているのが語順である。

テキストにおける意味構造すなわち情報構造を考えるうえで、情報の新旧ということが議論されてきた。情報の新旧は最も単純な情報処理の手続きから言えば、ある情報単位に先立って与えられている情報の総和の中に含まれるものとそうでなく新たに追加されるもの、という差によって表される。このような意味では情報の新旧は、先行する情報内容との照応によって明らかにされる。しかしテキストにおける情報の新旧というとき、事情はそれほど単純ではない。ここでは、しばしば指摘されてきたように、「先行する情報の総和」の範囲は、単なる「すでに言及された事柄」ととどまらず、テキストの生成に係わる者の知識、社会的コンテキストなどの言語外要因の作用を受けるし、また、文脈に照応して情報の新旧というとき、「すでに言及されたこと」「新たに言及されること」と

いう全く単純な二分法は十分なものではない。テキスト構成における旧情報としては例えば前文脈から受け手が導き出すことのできる(derivable)もの²、回復可能な(recoverable)もの³も認めなければならない。こういった点を考慮し、IC上の記憶におけるのとは異なる言語テキストについての情報の新旧を、次のように設定することができる：既知、これは周知の事柄、あるいは聞き手の記憶の中で容易に取り出せるaccessibleと考えられる情報。未知、これは全くの新情報あるいは聞き手にとって既存の文脈から導き出すことができない情報、場合によっては周知の事柄であっても発話の時点で聞き手の意識に上っていない事柄。このように既知、未知の定義を改めるならば、新しい命名が必要となる。ここでは前者を「文脈に結びついた(contextually bound)要素：CB」、後者を「文脈に結びつかない(contextually non-bound)要素：NB」と呼ぼう⁴。このように情報構造に関する二分法を設定すれば直ちに、このCB、NBが先に問題とした意味カテゴリーとしてのDEF・INDEFと密接に係わることに我々は気付く。つまり、DEFはCBの、INDEFはNBの表現形式として有効に機能することが予想される。

一般的に考えて、情報伝達は既知の事柄に未知の事柄が追加されるという流れに従うという指摘は尤もであるように思われる。この考えに従えば、テキストおよびその構成単位である文においてもそのような流れを乱さないように構成成分が配列されなければならない。つまり言語の基本的情報構造としては、文のレベルでもそれ以上の構成単位のレベルでも、CB←[CB+NB] の流れが実現されることが望ましい(CB ← [CB+NB] は、CBにNBが追加されそれが新たなCBとなる、というループを意味する)。この様な主張が世界の様々な言語に照らし合わせたとき、どこまで真実であるかを言い当てることはできない。のみならず、テキストや文脈の条件によって同一言語が異なった様相を訂することも考えられる。事実がさほど単純でないことは予想に難くない。しかしながら我々が考察を試みようとする幾つかの言語の基本的な、言い換えるならば中立的な構造には合

致しているように思われる。そういった言語では文においてCBであるような要素は文頭またはそれに近い位置に表われ、NBであるような要素は他の要素に対し後置される傾向を示す。

このCB・NBの関係は同時に、いまひとつの情報構造に関する二分法である、話題 (TOPIC)と焦点(FOCUS)とも無関係ではいられない⁹。話題と焦点の区別はあくまでも話者の意図において決定されるものである。話者が何を主題あるいは話題とするかは、聞き手にとっての情報の新旧とは基本的には無関係なはずである。しかしながらテキストの生成者—通常は話者—がテキストを構成するプロセスそのものが、程度の差こそあれ、受けての側の情報のストックを念頭に行われることが要求される (あるいは望ましい) 以上、話題とCBの間にかなり高い相関が見いだされるのは当然のことである。同じように焦点それ自体も、受け手に取ってはCBでもNBでもありうるわけだが、言語活動が何らかの情報伝達を目的とする以上、焦点即ちある話題が言及する対象は多くの場合必然的にNBとなるに違いない。これらの事柄を考慮にいれながらEE/NEEについての考察を進めていく。

2 基本的なEEの構造と意味

2.01. 上記の、CB/NB、および話題と焦点を考慮しながら一般的な傾向を予測するならば、EE、即ちあるXの存在が発話の主たる関心事であるような文において、XがNBである場合、焦点は「XがYにおいて存在すること、すなわちeY(X)」全体になるのが普通であって、XがCBであるような場合のEE—この場合、Xの存在そのものは通常前提として与えられており、それゆえそのようなCBであるXが話題化され、ある時点tでのYにおけるその存在が焦点になる—とは情報構造において異なるはずである。

このことと、主格主語文頭型の統語構造が基本であるIEの幾つかの言語において、XがNBである時にXに替わる虚辞主語を用いてEE構文が形成されるこ

とは無関係でなさそうに思われる：

201)DT In diesem Tal gibt es vielen Hase.

この谷にはたくさんの野兎がいる。

202)FR Il y a eu un tremblement de terre, hier soir. Tu l'a senti?

夕べ地震があったけれど気がついた？

203)EG There is a post office before you turn left.

左に折れる手前に郵便局があります。

これら三例は、一見して解るとおり、用いられるPREDの語彙においても、Xの表層格の形態においても、従ってAGRの現われ方も異なる。三者の中で唯一形態格の明示的な表現手段を持つドイツ語では、Es gibt...の要求によってX(SUB)は対格Xaccで実現され、そのためPREDのAGRに作用することがない。(cf. Es gibt ein Buch auf dem Tisch.)フランス語の場合、形態格の明示手段はなく、XはXnomと同型だが形式上はavoirの直接目的語の位置Xaccを占める。ここでもPREDにAGRは作用しない(Il y a des gens qui...). 英語では形式上は虚辞主語thereが用いられるが、AGRに作用するのはXnomである。こういった統語構造上の違いにもかかわらず、これらの構文は共通して、基本的にXが発話の時点tで文脈上特定化されていない、従って形式上は不定冠詞が、ゼロ冠詞と共に用いられるような名詞(句)であるという特徴を持つ：

cf. ? There is the post office before you turn left.

これらの構文においては明らかにNBであるようなXを文頭主語に立てるのを回避する傾向をみることができる。

上述した三つの言語と比較して、スラブ語の特徴として際立っているのは、文成分の配列が比較的自由だという点である。このことは勿論、文の構成成分の位置が特定の規則によって定められておらず、従ってその配列は恣意的である、ということの意味するのではない。全く自由な語順などというものは、少

なくとも言語がある一定の集団の中で最低限の伝達機能を保証しようとするかぎりありえないことである。スラブ語が全般に、他の幾つかのIEに比べ、語順が自由だというその自由度はせいぜい、IEの基本的語順であるS-V(S-V-0/S-0-V)や、個別言語において生じる語順の規則（例えばドイツ語における特定の枠構造や、あるいはフランス語の仮定の意味など特定の文脈的状况に応じて行われる主語と述語の倒置のような）の規則の安定性に対し、許容可能なヴェリアントの幅が広いという程度のことに過ぎない。スラブ語に見られる語順の特徴はむしろ、その「自由さ」にあるというよりは、主語（主部）、述語（述部）、補語（補部）などの文の構成成分の位置が、統語構造というよりは情報構造に依存して決定される点にあると言える。これは反対から言えば、語順を操作することによって特定の情報構造を文に付与することができることを意味する。そしてこのことが、情報構造に合わせて統語構造そのものを変形させる他のIEのいくつかの言語との著しい違いになっている。

2.02. スラブ語の中立的な発話では、話題先行－焦点後置の情報構造が取られる。同時にNBであるような要素が唐突に文頭に出ることが回避される傾向がある。このことを次のセルビアクロアチア語、スロベニア語、ロシア語の例は示している：

204)SH Prostorija je bila mala, u njoj su bila samo četiri stola.

[Eter, 21]

店は狭く中には四つテーブルがあるきりだった。

205)SL Na drugi strani reke je staro mesto, nad njim pa Ljubljanski grad.

川の反対側に旧市街があり、その上にリュブリアナのお城がある。

206) RS У профессора Керна имеется лечебница на дому для

особенно интересных в медицинском отношении больных. [Доуэль, 41]

ケルン教授には自宅に、医学的に見て特に興味深い患者のための
治療室があるのよ

Yは文脈上明示されないこともある。この様な場合、PREDがNBのXに先行する：

207) SL Bil je imeniten grof. Ta grof je šel v Gorjance na lov...

[Slov. skladnja, 163]

立派な伯爵がいた。この伯爵がゴリャンツィに猟に出かけた。

208) RS Какие же это больные? — Разные. Есть очень тяжелые
случаи. [Доуэль, 41]

「いったいそれはどんな病人なの。」「いろいろよ、とても難し
いケースがあるわ」

先に言及したように、語順は、冠詞のないこれらの言語においては実際、
言及対象のDEFまたはINDEFの特性を示すのにしばしば関与的な役割を果たす。そ
のことを次の例は示している：

209) SH Zaustavili su se pred jednom kućom [NB] u drvoredu, pa je
Brodarić izašao. Kuća [CB] je imala mali vrt [NB], u vrtu
[CB] su bile kugle od sjajnog stakla.

[Eter, 23]

彼らは並木の間のとある家の前で停車し、ブロダリッチが外へ出
た。その家には小さな庭があり、庭には光るガラスの球が幾つか
あった。

[eY(X)] 全体を焦点とする構文における同様の傾向は、IE型以外の言語も見ら
れる：

210) MG Afrikában nagy őserdők vannak.

[Africa-in big jungles are<lenni('be', 3pl. pres)]

アフリカには大密林がある。

どのスラブ語でもEEのPREDとして、Xの内在的意味特性に係わりなく存在を表する動詞bitiが用いられる:

211) SL Istega dne sta bila v Nikšiču in na Cetinju mitinga solidarnosti z nealbanskim kosovskim prebivalstvom.

[Mladina 1988 št. 41]

同じ日、ニクシチとツェティニェでコソボの非アルバニア系住民への連帯のための集会があった。

212) SL V vsakem človeku je nekaj dobrega.

どんな人にも何かしら徳がある。

2.03. ロシア語の他のスラブ語と異なる特徴は、**БЫТЬ** の現在時制におけるパラダイムの大幅な縮小に起因する、EEの統語構造の特異性である。現代ロシア語では本来 **БЫТЬ** の三人称単数現在時制であった **есть** を除き現在形は語形変化の体系から消失してしまっている。このために現在時制では述語として必要な場合、**есть** が用いられる:

Есть случаи...

...という場合がある。

さらに一般に知られているように、**есть** がゼロ形と交替し、EEにおいてPREDが音形を失うような場合がある:

213) RS В парке сад и фонтан.

есть 型とゼロ型の対立の意味は、X の存在を強調する場合に **есть** が用いられると理解されるが⁶、その背後にはXを巡る前提の違いがあることを見て取らなけ

ればならない。ゼロ型と *есть* 型の対立において生じる次のような意味の違いに注目する必要がある：

214A) В этой библиотеке интересные книги.

214B) В этой библиотеке есть интересные книги.

上記の例はどちらも「この図書館には面白い本がある」と訳せるが、214A) は普通、「この図書館の本は面白い」の意味で、214B) は「この図書館には（いろいろある中に）面白い本が〔本も〕ある」の意味で理解される⁷。つまり前者のXの指示領域は図書館にあるすべての本（ $\forall X (eB(X) \Rightarrow I(X))$ ）であるのに対し、後者では実際のXの指示範囲は図書館の本の一部にしか及ばない。この違いは実は、両者の前提の違いに起因していると思われる。*есть* を含まない文では「 $eB(X)$ ：この図書館にはある特性Qを持った本（複数）があること」が話者において前提とされており、従って発話はそのようなXの特性（ $I(X)$ ：Xは面白い）のみを焦点としているために、実際の文脈では「（今話題としている）図書館の本は面白い」という解釈がなされるのに対し、*есть* を含む文では「図書館にありかつ $I(X)$ であるようなXの存在」全体が焦点であり、そのことは $I(X)$ でないような他の要素の存在を排除しないゆえに「この図書館には面白い本がある（ $\exists X (eB(X) \& I(X))$ ）」という意味が生じると考えられる。このような用法に見るかぎり、ロシア語のEEではXの存在そのものが話者において前提化されており、そのXについての特性を述べる場合と、 $eY(x)$ 全体を焦点とする場合とで、ゼロ型～ *есть* 型の使い分けが行われると予想することができる。存在の強調の意味は明らかにこの後者の機能の延長上に位置づけることができるだろう。このゼロ～ *есть* の交替によって生じる文脈的意味の対立は後述する所有所属の表現においても平行的に現れる。

気を付けなければならないのは、周知のように、この対立が実現されるのは現在時制の場合に限られるということである。*быть* が現在時制以外の時制・法のカテゴリーに対応するときには対立は中和される。この場合 *быть* は、

Xnomと性数一致した形態で用いられる：

215) Но в глазах была жизнь, была мысль. [Доуэль, 36]

けれどもその目には生命が、思考があった。

2.04. 考察のこの段階で、EEとcopulaを用いた文との関係をはっきり見ておく必要がある。周知のようにIEの多くの語では共通して、EEのPREDとして英語でbe動詞に当たる動詞語彙が用いられる。今このような語彙群をBEとしよう。BEとその他のEEのPREDとして用いられる動詞（EXISとする）との明確な違いは言うまでもなく、EXISの語彙機能としての単一性－存在の意味を語彙として表現するのみである－と比べたときのBEの統語上の多機能性である。BEは助動詞として複合時制形態の形成に参与するし、連辞としての機能を果たしもする。後者の機能に関連してBenvenisteが指摘したのは、存在の意味も連辞の機能もBEにとって必然的なものではないということであった⁸。IEのある言語はBEにcopulaとしての機能のみを残し存在の意味はEXISに専ら委ねる形で発展した。その結果そのような言語では、BEにおける二つの意味機能の衝突は回避された。

copulaの機能は意味の上から言えば、あるカテゴリーP、あるいはそのカテゴリーに属する個体P(X)からP またはP(X)の属性であるような、あるいはP(X)がその外延であるようなカテゴリーR への写像として捉えることができるだろう。このかぎりにおいてこれは明らかにXYの間に成立する存在・不在の関係の意味とは異なる。両者に共通するのはただ、相異なる二つのカテゴリー間において認識される関係の状態を述べる、という機能のみである⁹。しかしながら事実は多くの言語において、BEがEEのPREDとcopulaとの機能を同時に担っていることを示しており、所与の文から我々がBEを存在の意味として理解するのは、統語構造における構成成分の形態格によってである。

BEによるEEではX [SUB] はXnomとなり、Xの文法的特徴がPREDのAGRに作用する。XがXnomであるかぎりYはYnomにはなりえず、存在の場所を示す斜格

Ylocとなる。一方BEがcopulaである文では主体Pも写像先のカテゴリーRとともに形態格として主格を取りうる。そのために連辞で結ばれる二つのカテゴリーはあたかもcopulaを等号とする等式の両辺であるかのような形式を持つ。事實はしかし、すでに指摘したとおり、連辞で対応付けられる二つのカテゴリーは常に等価ではなくしばしば一方が他方の内包または外延であることを示す。

同時に我々は、EEと連辞による文が時として極めて接近することを認めなければならない。前述のロシア語の例：214A) のような **быть** のゼロ型文は、やはりロシア語に特徴的なゼロ連辞文と近い関係にある。また、意味上はEEである文がある種の連辞文と見かけ上同一の構造を持つこともある：

216) EG Cockroaches are everywhere.

ゴキブリはどこにでもいる。

この場合「どこにでもいる」のはカテゴリーG(X)(: =「Xはゴキブリである」)に属する個体の属性ではない¹⁰。これは我々の記号で言うところのY[L0C] が特殊な形態で現われた場合と見なすことができる。

スラブ語に見られる連辞文の特徴は、RがRnomでなければRinsで表される点である。連辞の文法的形態はPと一致する。この点に関連し、現在時制においてゼロ連辞が現われるロシア語の構造は、EEのPREDにゼロ型が現われることと平行して注目に値する：

217) RS -Мы зайдем в Марсель?

-Нью Йорк - первая остановка. [Остров, 39]

マルセイユに寄りますの? - ニューヨークが最初の停泊地です。

218) cf Разве воскресение из мертвых не было тысячелетней

мечтой человечества? [Доуэль, 36]

死者の蘇生は人類にとっての永い間の夢ではなかったか。

スラブ語とは系統のことなるマジャール語にも類似の構文が見られるがマジャー

ル語のゼロ連辞文は三人称の現在時制の場合に限られる¹¹ :

219) MG Budapest a magyar tudományos és kulturális

[B . the hungarian scientific and cultural
élet központja.

life centre-its]

ブダペストはハンガリーの学問文化の中心である。

220)cf. A XIX század második felében már Budapest volt a

[the XIX century second half-in already Bp. was the
magyar szellemi élet központja.

hungarian spiritual life centre-its.]

十九世紀後半ブダペストはすでにハンガリーの文化的生活の中で
あった

221) A budapesti agrár egyetem elsőéves hallgatója vagyok.

[The Budapest agricultural university 1st year student I am.]

私はブダペスト農業大学の一年生です。

このようにマジャー語では連辞文で一部ロシア語と平行的な現象を示すが、EE
においてはロシア語とは異なりつねに音形を持ったBE(lenniの変化形)が必要で
ある。

205. セルビアクロアチア語ではhave動詞に当たる動詞imati の三人称
単数現在形imaをもちいてEEが形成される¹²。この表現はXが INDEF、従ってNB
である場合に多く用いられる。この時主格主語が空位となって所謂非人称構文が
取られると、XはXgenで現われる :

222) SH Ima li vode? (<voda, gen. sg)

水、ありますか?

223) U onoj šumi ima vukova. (<vuk, gen. pl)

あの森には狼がいる。

224) Ima situacija - nastavljao je Vodopija teoretizirati - u kojima
od istine može biti više štete nego koristi, shvaćate?

(situacija, gen. pl)

[Eter, 10]

状況によっては、とヴォドピヤはさらに理屈をこねた。真実が利益よりは損害をもたらすこともあるのですよ。

この構文にはXがXnomをとる変種がまれにある。この時PREDはXnomの数と一致する¹³ :

225) Ima čovjek koji ne voli takve stvari.

そういうことを好まない人がいる。

226) Na ovom brdu imaju tri velika hrasta. (imaju<imati, 3pl. pres.)

この丘に三本の大きな樫の木がある。

この様な統語構造が許容されるために所有を表す他動詞としてのimatiを述語とする構文との見かけ上の類似が生じる :

227) Svaki čovjek ima svoje mišljenje. / Svi ljudi imaju pravo na
slobodu.

誰もが自分の考えを持っている。 / すべての人は自由の権利を持つ。

この両者の区別のためには構文の他の構成成分の各形態に注意を払う必要がある。

227)のような所有表現の場合、対格若しくはそれと等価の補語が不可欠である :

cf. *Svaki čovjek ima. / *Svi ljudi imaju.

EEとしての ima+Xnom の構文は許容されとしてもXが三人称の場合に限られる。

一般にX [SUB] にXnomを割り当てようとするかぎり、bitiが用いられなければならない :

228) Ja sam u Zagrebu, a vi ste u Istanblulu.

228#) *Imam ja u Zagrebu, a imate u Istanbulu.

セルビアクロアチア語のBEとしての ima+Xgen/(Xnom)の今一つの特徴は、現在形

でしか用いられないことである。それ以外の場合はBEの変化形がパラダイムを補う。というよりむしろ、EEをPREDとするEEの現在時制の特殊なヴァリエントとしてimaによる構文があると考えられるだろう。これらの場合、人称構文が選択されればXはXnom、PREDのBEはINFL(AGR)の作用した文法形態を取り、非人称構文が選択されれば主格主語は空位、XはXgenとなり、PREDは中性単数のカテゴリーで表される¹⁴ :

- 229) Naći ću načina da to emitiram – reče mladić... Ipak, bilo je u
tome neke tvrdoglavosti [Xgen]. (bilo je<biti, n. sg. pft.)
[Et er, 17]

そいつを放送する方法を見つけるさ、と若者は言った … がそこに
、 は頑ななものがあつた。

- 230) Na stubištu je bio zelen tapison [Xnom]. (bio je<biti, m. sg.
pft.) [Eter, 10]

階段には緑色の敷物が置かれていた。

3. NEEの意味と構造

3.01. 一般にある発語 α は何らかの形で否定することができると考えてよさそうである。このことはしかし、すべての肯定表現に否定表現が一对一で対応することを直ちに意味するわけではない。言語表現としての肯定と否定の関係に、形式論理学で言うような、真理値が正であるような命題 P に対し、負の真理値を持つような命題 $\sim P$ という二項関数をあてはめたところで、自然言語における否定表現の特徴を何も説明したことにはならない。語用論的な面から否定と肯定の関係を考えるならば次のことが言えるだろう：一方で、現実の言語に現われる否定はその背後に常に肯定表現によって表される何らかの「あるべき状況」、正の真理値に対応する世界を持つ必要はなく、他方で、肯定と否定の表す状況の

関係が精々、同時に成立しないという範囲で相反するもの、という程度であるならば、ある肯定表現に対する否定表現、あるいはその逆、は幾通りか可能なはずである。このことは実は否定、さらには発話の多義性もしくは曖昧性と関連する問題である。

普通、ある否定表現は否定のオペレータNEG によって実現される。ある主体Xの不在は基本的なEEにNEGの作用が加わって表現される。ところで、EEとNEE の間には一見して奇妙に思われる関係がある。今、次の二つのEE：

301A)JP 机の上にペンが一本ある。

301B)EG There is a pen on the desk.

に対する否定を考えてみる。与えられたEEを、否定表現形成の尤も基本的な手続きにしたがって書き換えてみると－それは日本語でも英語でも $PRED \Leftrightarrow PRED+NEG$ であるから－以下のようになる：

302)JP 机の上にペンが一本ない。

302B)EG There is not a pen on the desk.

英語の文は通常の解釈でノーマルな文であり、その意味するところは “ There is not a (single) pen on the desk.”である。一方、日本語の方は我々の日常言語の直感からすれば301A) の否定としては奇妙な感じがする。何故なら日本語としてのスタイルの善し悪しを別にすれば、この文の意味するところは「机の上に（本来あるべき）ペンが一本ない。」あるいは「ペンが一本足りない」に相応するからである。なぜ302A) がそのような意味で理解されるのかについては、日本語の助詞「が」の中立叙述の機能など、論ずる点が多くあろうが¹⁵⁾、今個別的な言語の統語規則はさて置き、次のような一般的認識に目をむける必要がある：ある発話の時点tにおいて文脈上特定化されていない個体Xの不在は、Xそのものの不在を表すのではなく個体X が属するカテゴリーの不在として理解される。

このことはある限定された（文脈上特定化されたX）の不在と比較した

とき否定の興味深い性質を明らかにする。文脈上特定化されたものの不在は普通、Xの「特定の場Yにおける不在」に言及するのであって、話者の意識世界においてXの存在そのものは否定されていない。つまりはある対象の特定化という文法的手続きは、その時点においてその物の存在を前提とすることの反映と見なすことができる。勿論例えば、: The book he bought is not found in the classroom, because he did not buy any book. ということは可能である。この場合本来前提である命題: 彼は本を買った = 彼が買った本がある: There is a book he bought. が否定されるわけで、所謂「前提解消 presupposition cancelling」のメタ言語的否定である¹⁶。これはラッセルの有名な例: The present king of France is not bald (because there is not a king of France.) 以来(より厳密に言うならばそれよりはるか以前から)論じられてきた、前提が充たされない場合の否定の解釈に連なる問題である。

この様なDEFの特性を付与されたXの存在の否定とは異なり、INDEF であるようなXを含むEEに対する否定ではしばしば、基本的なEEに単にNEGオペレータを付加するのみではなく、何らかの統語上の操作が必要になる。この様なところではしばしば否定対極表現 (Negative Polarity Items): NPIs が現われる。上記の英語の例301B) が a penでなく some booksであれば some をNPIsのany に替えて:

303) There are not any books on the desk.

とできる。日本語として301A) の否定に対応するには

304) 机の上に一本もペンがない・一本のペンもない。

のように助詞の交換が必要になる。

ところで先に述べたように、肯定表現の否定は常に一つであるとは限られない。発話において何が前提とされているかによって否定の現われ方、言い換えるならば否定の作用域が異なることを知っておく必要がある。6と同時に成立

しない状況をすべて \bar{b} に対する否定と言うことができるとすれば302A) も304)も、301A) の否定と言えるだろう。この二者の違いを記号論理学の形式を借りて表せば次のようになる：

302A) $\exists X(B(X) \& \sim D(X))$

304) $\sim \exists X(B(X) \& D(X))$

話題は、時として、これに対して焦点が形成される発話において、そこに含まれる否定子の作用域外にあるように理解される¹⁷。これはしかし現象の一部のみを捉えた言い方である。否定は実際には話題に元々含まれているか、あるいは肯定されている話題についての焦点に作用するかのどちらかである。実際の発話が、ある肯定命題で表されるような前提PRESUPに基づくとき、そのPRESUPに対応する表現要素はNEGの作用域の外にある。そのような要素が話題化されれば当然、話題はNEGの作用域外にある。いかなる要素であれ、NEGの作用域の外側にあればNPIsは現われない。先に言及したsomeとanyを例に取るならば：

305) EG I did not understand any of his lectures.

306) I did not understand some of his lectures.

において305)が通常の全面的否定であるのに対し、306)では（前提解消の否定である場合を除けば）：There were SOME lectures that I did not understand. が前提となっていることを示している。

4. NEE:スラブ語の特性

4.01. 我々の主たる考察対象であるいくつかの言語に目をむけよう。

セルビアクロアチア語でもスロベニア語でも、Xの不在を表すにはPREDにNEGを付加する手段が通常用いられる：

401)SH Kad sam vas posjetila, niste bili kod kuće.

お尋ねしたときお宅に居られませんでした。

402)U njoj(knjižnici)ne postoje dva odjela. [Povjest knjiga]

そこ(図書館)には二つの分室はない。

セルビアクロアチア語では前述のEEとしてのima+Xgen(Xnom)に対応してnema(<ne+ima)+Xgenが用いられる。実際の用例から見るかぎり、XはDEFでもINDEFでも、また一・二人称でもこの構文を取ることができる：

403)A zašto ti ne uđes? -upita ga ona. -Oca nema. (oca<otac, gen)

[Eter, 203]

どうして入らないの、と彼女は彼に聞いた、父さんはいないわ。

404)(Olovka)Bila je kratka, pa je imala metalni produžetak; ni toga više nigdje nema. (toga<to, gen.)

鉛筆は短く金具の補助軸がついていた。それももうどこにもなかった

405)Ako me nema, pitaj ga gdje sam ja. (me<ja, gen.)

わたしがいなかったらどこにいるか彼に聞いてよ。

nema+Xgenはima+Xgen(Xnom)と同じように、現在時制以外ではne+biti [INFL] + Xgenと、BEを用いた構文になる。この時統語上の主格主語は常に空位、PREDは中性単数の形態を取る¹⁸：

406)Otkad svijet postoji, toga čuda nije bilo.

天地開闢以来こんな奇跡はなかった。

407) Tu nije bilo nikoga neočekivanog.

そこには予期せぬ人はいなかった。

bitiを人称形で用いることも可能で、このときXはXnom、PREDのBEはXと性数一致する：

408) Nije bila rasprava o budućnosti nesvrstanih zemalja.

非同盟諸国の将来についての討論はなかった。

スロベニア語ではBEによるEEに対応する否定はすべての時称で、NEG+biti [INFL] +Xgenの非人称構文となる。従ってPREDは常に中性単数である¹⁹：

409) SL Njegovega odgovara še ni. (ni<ne+je)

彼の返事はまだない。

410) Inteligenco kot državni sloj sestavljajo vsi tisti, ki se ukvarjajo pretežno z umskim delom. 'Pretežno', ker ni ne čistega umskega in ne čistega fizičnega dela. [Sociologija, 261]

社会層としての知識階級は主として知的労働に従事する人々によって構成される。「主として」というのは純粋な知的労働も、純粋な肉体労働も存在しないからである。

4.02. ロシア語では基本的なEE、即ち Yloc+BE+Xnom に対するNEEは普通、NEG {ne+BE}) +Yloc+Xgenの非人称構文を取る：

411) RS В городе есть театр. ↔ В городе нет театра.

412) На стенах были фотографии. ↔

На стенах не было фотографий.

この構文を巡っては幾つか興味深い点が指摘されている。第一にEEの場合の есть～ゼロの交替に対応してNEGを含む形式においても нет [не+есть]～неの選択がある。文脈におけるこの二つの形態の選択基準は次のように設けられる：NEEで実際に否定されるのがXの存在そのものではなく Q(X)であるようなX、

いはXの特性Qである場合、HeTではなくEEのゼロ型に対応してHeが用いられる²⁰：

413) На складе не новый товар (а старый).

cf. На складе новый товар (а не старый).

413)の様な場合はしたがって厳密にはNEEというよりはXの属性についてのゼロ連辞文の否定と見ることができる(v. 2. 03)。

第二に注目すべきなのは、NEG [BE] +Xgenと平行してNEEとしてNEG [BE] +Xnom の構文が選択可能である点である。この両者の文脈上の意味および語用論的な違いは、X が何らかの事象であるとき、即ち発話が事象の不生起を述べる場合には常に非人称構文が選ばれるのに対し、Xが特定の人で、ある場におけるXの在が述べられる場合には両者が許容されるところにある：

414) Сегодня ветра нет/не было/не будет.

415A) Он не был вчера на собрании.

415B) Его не было вчера на собрании.

このことは前節3. 01で言及した、ある時点tにおいて特定化されているXの不在とそうでないXの存在の否定の違いと引き比べてみると興味深い。特定化された人物についてのNEEではXの存在それ自体は否定されず、否定されるのはある場Yにおける存在である。いっぽう事象の生起の否定はそのような事象が存在しなかったこと、つまりは全称的な否定となる。ここから、個体項Xの意味特性に係わりなく、Xgenをとる非人称構文はXの完全な不在、つまりはXの存在的前提自体の否定を表すのに対し、Xnomをとる人称構文はXの存在を前提として場合に対応するとひとまづかんがえられる。この予想はBE以外のEXISを述語とするNEEにおいても当てはまるように思われる。ロシア語のEXISの幾つかの述語形： существует, найдется などにおいても、NEEとしてはX が特定化されていない場合、あるいはあるカテゴリーとしてのX全般の不在に対しては Xgen とする非人称構文が用いられるのに対し、特定化されたXの不在にはXをXnomとする人称構文が優先的に用い

られることが指摘されている²¹：

416) Ошибок в рукописи не встретилось.

417) Ошибка, о которой вы сказали, в рукописи не
встретилась.

実際のテキストにおいては、X が特定化された人物でも非人称構文が取られる場合がある。これはある限定された時間断面tでの特定の場での不在を表す用法に認められる：

418) Меня не было там, откуда мне знать, что он говорил?

419) В это время Пети не было в Киеве.

このような場合の非人称構文は、ある明確に限定された状況におけるXの完全な不在の表現と言える。状況としてのYに与えられた時間的制限が緩やかになると人称構文が許容され、主体の存在は蘇る：cf. Петя не был в Киеве.

(P. はキエフに居なかった・行かなかった・行ったことがない)

また、不在を強調する語彙： никакой, ничей, ничего. を伴って、あるいは「ほんのわずかな… (もない)」のような表現でXがXgenとなる非人称構文が取られるのもXの完全な不在というおなじ意味特性において把握することができるだろう。

5. 存在と所有を巡る問題

5.01. Yは主体Xの存在する場である。それゆえこの意味格を我々は所格LOC とした。LOCもSUB同様表層においては様々な形態格を取る。SUBであるXがXnomとして実現される場合にはLOC はYnom以外の格形態となる。ところでXのYにおける存在という関係の中で、YはXの存在が認められる具体的場所の意味から、Xの帰属先である個体、Xの所有者までの広い意味的変位幅を持つ。このなかではYがYnomとなり、XYの関係が所属－所有の意味において捉えられる場合がある。

このとき意味格のSUB は表層ではYの直接目的格に、意味格のLOCは、より狭義の受益者格 *benefiter*として表層では主格主語となるという格配置のよりダイナミックな変更を伴う。とはいえ、存在と帰属－受益者から見れば所有－のカテゴリーを言語表現として本質的に区別する必然性はどこにもないように思われる。これらはいずれも、ある存在主体Xと、その存在・不在が問題とされる場Yとの関係という同一の意味カテゴリーに属する。この、基本的に同じ意味構造が、主として言語外的要素(X, Y間の物理的關係や一般的社会通念など) によって「存在」として認識されたり、「所有」「帰属」として特徴付けられるのである。これらの意味の間にあきらかに、我々の日常言語の感覚で現実的な差異があるとしてもそのことと言語表現の背後にある意味カテゴリーとして区別することは別の問題である。そこで広い意味でのEEの下位カテゴリーとして帰属・所属所有関係の表現（まとめて所有表現とする）を位置づけることができる。このことは、例えば *My sister is in the kitchen.* と *Mr. Holmes has an apple.* という明らかに全く異なった統語構造が表す状況を同一範疇で扱うことになる。確かに所有の意味はIEでは主としてHAVEあるいは所有の意味を持つ二価の動詞を述語とする他動詞構文によって実現される。これらは明らかにBEあるいはその他のEXISを述語の核とする自動詞構文とは統語構造の性格上異なるものである。これに対してはしかし、次の二つの点を考慮する必要がある、即ち一つはBenvenisteが指摘したような、HAVE動詞の他動詞としての特殊性であり、今一つは所有表現が形式上存在表現と区別されない言語の存在である。

第一の点に関して言うならば、所有表現のPREDとしてのHAVE若しくはその類義語の語彙的特徴として、他動性の性質にもかかわらずこれらを含む構文が受動変形されないという事実がある²²：

501) EG *I have all the books written by the journalist.*

501B)**All the books written by the journalist are had/possessed by*

me.

502) DT Der Bahnhof hat ein bereites Vordach.

その駅には幅の広いひさし屋根がある。

502B)*Ein bereites Vordach wird von dem Bahnhof gehabt.

このことは、HAVEおよびその類義語が、その見かけ上の他動詞性にもかかわらず、実際に表しているのがその他の他動詞のような、統語上の主語から直接目的補語への作用ではなく受益者（表層の主語）と存在主体（表層の目的語）の間に成立する関係であることを示している。実際、I have three brothers. というとき、HAVEは具体的な所有というよりは、私にとって兄弟に当たる人物が三人存在することを表している²³。

第二の点について、即ち所有関係がEEと同型の統語構造によって表現される言語があるということに関して見るならば、例えばマジャール語がそのような言語のひとつである。マジャール語にはHAVE動詞がなく²⁴、所有関係はEEと同じくBEを用いて表される。このときYはYloc, XはXnom+ [所有語尾] となる：

503) MG Gabinak színes könyve van.

(Gabi-at colour book-his is)

ゴビはカラーの本を持っている。(ゴビにはカラー本がある)

504) Pestnek a XVIII században még kevés lakosa volt.

(Pest-at the XVIII century-in still small population-its was)

ペシュトは18世紀には人口はまだ少なかった。

505) cf. A Nemzeti Múzeum könyvtárában több mint kétmillió könyv van.

(The National museum library-in more than two million book is)

国立博物館の図書館には二百万冊以上の蔵書がある。

マジャール語のこのような構文は直ちにロシア語の同様の現象を想起させる。勿論

ロシア語ではHAVEに当たる動詞иметьを用いて所有関係を表すことが可能である：

506) RS Сосед имеет троих сыновей.

507) Я не имею намерения вредить вам. [Пиковая дама]

にもかかわらず иметь は他のIEのHAVEほど、所有表現のPREDとして機能範囲が広くない。その使用は通常Xが抽象的なものの場合、もしくはある種の固定化した表現 (имеет значение/возможность, не имеет ничего против itd.) に用いられるほかは稀であり²⁵、所有表現は多くの場合、EEと同型の構造を用いて表される。所有表現としての特徴はこのとき受益者Yの表層格として、y+Ygen が現われることである：

508) У соседа трое сыновей.

509) У нее голубые глаза.

所有表現における есть ～ゼロの交替の基本的な意味は、すでに2.03で考察したEEの場合と同じである。YにおけるXの存在全体が焦点化されるときには есть が用いられ、一方Xの存在は前提されていてその特性Qについて言及される場合にはゼロ型が取られる。この基本的原則は例えば、Xの所有そのものを表す意味で есть が用いられるのに対し、ある場Y(=受益者)におけるある時点tでのXの存在、という意味での所有表現ではゼロ型が用いられることにも対応する：

510) У меня есть книга. (その本を持っている=所有している)

511) У меня книга здесь. (今ここに持っている、私の所にある)

また、XがYから分離不可能なものであるようなQ(X)について言及される場合(上記の例)509)にゼロ型が用いられるのも、Xの存在そのものが話者において前提されている場合の一つと考えられる。EEに於いて観察されたXの指示範囲の違いと同様の現象もあるが、これも同じ原則において理解することができる(v. 2. 03)：

512) У нее есть седые волосы. (彼には白髪がある)

513) У нее седые волосы. (彼は白髪頭だ)

5.02. ロシア語とは異なり、セルビアクロアチア語でもスロベニア語でも、所有関係はHAVE動詞:SL:imeti;SH:imatiによって表すことができる:

514)SH Preko radija ću ja emitirait... Moj ujak ima radio stanicu.

[Eter, 22]

無線で放送するさ、叔父貴が無線局を持ってるんだ。

515)SL TV Ljubljana ima na področju umetniškega programa v arhivu

4 igrane programe. [Mladina, 1988, št. 41]

リュブリアナテレビには、芸術番組の分野では記録保管所に四本のドラマがある。

516) V Ljubljani imamo dve vodilni gledališči, dramsko in operno.

リュブリアナには演劇劇場とオペラの二つの主要な劇場がある。

imeti/imatiにNEGが作用するとそれぞれ、現在時制で SH:nema-; SL:nima-, それ以外の時制ではNEG +imati/imeti [INFL] の形を取る (ex. SH:pft:nije imao/imala(3. sg. m/f), futur:neću imati(1. sg.); SL:pst. ni imel/imela(3. sg. m/f), futur: ne bom imel/imela(1. sg. m/f))。否定を含む所有構文の場合、スロベニア語では常にXgenが義務的であるのに対し、セルビアクロアチア語では生格若しくは対格が用いられる:

517)SH Uglavnom ništa - uzdahnu Berak, -u svakom slučaju, on nema

ništa protiv da to radimo. (ništa, acc) [Eter]

まあ何も、ベラクは溜息をついた、何にしても彼はこっちがそれをすることに異存はないさ。

518) Novinari su znali da ujak nema djece, a da Tomislav nema oca.

[Eter, 27]

記者達は叔父に子供がなく、トミスラブには父親がいないのを知っていた。

519)SL Pravi, prirodni oče nima nobenih posebnih pravic do nji

(=otroci).

[sociologija]

本当の父の父親は彼ら（子供達）にいかなる権利も持たない。

この、スロベニア語において義務的な、そしてセルビアクロアチア語において選択的な生格補語は、他動詞をPREDとする発話が否定された場合、対格の直接補語が生格に替えられるというスラブ語の所謂否定生格の用法の上に位置づけることができる。興味深いのはこのような否定他動詞構文においてスロベニア語では、Xの文脈上の意味特性に関係なく基本的に常に生格が用いられるのに対し、隣接する言語であるセルビアクロアチア語ではこの様な否定生格の使用は義務的でないばかりか、しばしば古文的な意味合いや方言的性格を持ち、通常は対格がそのまま用いられる点である²⁴。

ロシア語では *иметь* を用いた所有表現の否定において Xが生格となるか対格となるかはロシア語における否定生格の問題と関連して考察しなければならない点であり、これについては別稿で扱うこととする。

注

1. INFL, AGRは生成文法の記号を借用した。ただし本論は生成文法とは特に接点を持たないものである。
2. Kress, G., Halliday : system and function in language, London Oxford Univ., 1976, p176.
3. Halliday, M. A. K., Notes on Transitivity and Theme in English, JL, 1967, vol.3, 37-81, 199-244.
4. Sgall, P., Hajcová, E. & Paněnová, J., The meaning of the sentence in its Semantic Aspects, Reidel Publishing 1986, p178-179.
5. このタイプの二分法についてはMathesiusのzáklad-jedro以来、theme-rheme, topic-comment など様々な用語と概念が用いられてきた。これらについて詳細を述べることは本論の目的ではないのでここではただ、話題と焦点 (topic-focus)のみ使用した。これについては例えば : Daneš, P. ed., Papers on Functional Sentence Perspective, Prague ;Mouton, 1974.を参照。
6. V. ex. : Evreinov, I., Die Semantike einer Nullform : Versch einer neuen Definition der Kopula im russischen, Linguistics 1972, p50.
7. Практическая грамматика русского языка, М. 1985, стр. 64.
8. Benveniste, E., 'être' et 'avoir' dans leurs fonctions linguistiques, BSL 55, 1960, in : Problèmes des Linguistiques généraux, Gallimard 1966.
9. しかしながらPと属性Qの関係が、属性としてのXとYにおける存在の表現形を取る（あるいはその逆）のも事実である : There is something snobbish with him. vs. He is somewhat snobbish.
10. 白井賢一郎 形式意味論入門、産業図書 1985, p225.
11. Rács, E. & Takács, E., Kis magyar nyelvtan, Budapest 1987⁷, p225-227.
12. V. ex. : Stevanović, M., Savremeni srpskohrvatski jezik, Beograd 1986⁵,

- II, str. 198 ; Rešetar, Elementargrammatik der serbokroatische Sprache, Halle 1959², p96.
13. Maretić, T., Gramatika hrvatskoga jezika za niže razrede srednjih škola, Zagreb 1901, str. 218.
14. Stevanović, M., op. cit., ibid.
15. 久野暲, 日本文法研究, 大修館 1973; 白井賢一郎、前掲書.
16. この問題については数多くの研究がある。V. ex. : Horn, L., Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity, LG 1985, vol. 61, p121-174.
17. ex. Leech, G., Semantics, Penguin Books 1981², p291.
18. Maretić, T., Gramatika hrvatskoga ili srpskoga književnog jezika. Zagreb 1963³, § 524.
19. Toporišič, J., Slovenska slovnica, Maribor 1984, str. 426. ; Vencenot, C., Essai de grammaire slovène, Ljubljana 1975, p253-254.
20. Evreinov, I., Op. cit., p52.
21. Практическая грамматика русского языка, стр. 81-82.
22. Benveniste, E., op. cit.
23. このことは無論、HAVEの機能の広汎さと結びついている。HAVEはXY間の様々な関係に言及することができる : I have a headache ; I have something to show you. など。
24. マジャーラ語でもpossess(所有する)に当たる他動詞birtokolを用いて所有関係を表すことはできる (Birtokol valami (<valami, acc. 'something'))。しかし一般的には所有関係は本文中に記述したような構文によって表される。
25. Evreinov, I., op. cit., p82; also : Селиверстова, О, Н, Семантический анализ предикативных притяжательных конструкций с глаголом 'быть', ВЯ 1973, 5, стр. 95- 105.

26. Toporišič, J., op.cit., str. 426-427; Priručna gramatika hrvatskoga književnog jezika, Zagreb 1979, str. 366.

例文出典

Беляев, А., Голова профессора Доуэля; Он же, Остров погибших кораблей, в: собрание сочинений, Л. 1983.

Goričar, J., Temelji obče sociologije (一般社会学の基礎), Ljubljana 1980.
Mladina(リュブリアナ発行週刊誌)

Pavličić, P., Eter (エーテル), Zagreb 1983;

Povjest knjiga (本の歴史), Zagreb 1986.

Toporišič, J., Nova slovenska skladnja (新スロベニア語統語論), Ljubljana 1982.

辻邦夫、秋の朝光の中で; サラマンカの手帖から, 筑摩書房 1976.

大木幸介、毒物雑学事典 講談社ブルーバックス 1985.

参考文献

1. Banhidi, Jokay & Szabó, Learn Hungarian, Budapest 1980⁵.
2. Benveniste, E., 'être' et 'avoir' dans leurs fonctions linguistiques, dans; Problèmes des Linguistiques généraux, Gallimard 1966.
3. Daneš, P. ed., Papers on Functional Sentence Perspective, Prague; Mouton 1974.
4. Evreinov, I., Die Semantike einer Nullform: Versuch einer neuen Definition der Kopula im russischen, Linguistics 1972, No.98, p41-57.
5. Helbig, G. & Buscha, J., Deutsche Grammatik, Leipzig 1986⁹.
6. Horn, L., Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity, LG 1985,

- vol.61, 121-174.
7. Kiefer, F., A transformational approach to the verb VAN 'to be' in Hungarian, in : The verb 'be' and its synonyms, no.3, ed. by Verhaar, J., Reidel Publishing, 1968, p53-84.
 8. Kuno, S. 日本文法研究 大修館 1973.
 9. Leech, G., Semantics, Penguin Books 1981².
 10. Magyar nyelvkönyv idegen ajkúak számára, Budapest 1981.
 11. Maretić, T., Gramatika hrvatskoga ili srpskoga književnog jezika, Zagreb 1963³.
 12. Maretić, T., Gramatika hrvatskoga jezika za niže razrede srednjih škola, Zagreb 1901.
 13. Практическая грамматика русского языка, М. 1985.
 14. Priručna gramatika hrvatskoga književnog jezika, Zagreb 1979.
 15. Rács, E. & Takács, E., Kis magyar nyelvtan, Budapest 1987⁷.
 16. Rešetar, M., Elementargrammatik der serbokroatische Sprache. Halle 1959².
 17. Селиверстова, О. Н., Семантический анализ предикативных притяжательных конструкций с глаголом 'быть', ВЯ 1973, 5, стр. 95-105.
 18. Sgall, P., Hajcová, E. & Panenová, J., The meaning of the sentence in its Semantic Aspects, Reidel Publishing 1986.
 19. 白井賢一郎 形式意味論入門 産業図書 1985.
 20. Stevanović, M., Savremeni srpskohrvatski jezik, Beograd 1986⁵.
 21. Toporišič, J., Nova slovenska skladnja, Ljubljana 1982.
 22. Toporišič, J., Slovenska slovnica, Maribor 1984.

23. Vencenot, C., Essai de grammaire slovène, Ljubljana 1975.